

活動事例

園庭の自然物で遊ぶ

活動スケジュール：令和6年10月から令和6年12月
テーマ設定理由：起伏のある森を有した自然環境を生かし、幼児が主体的に環境に関わり、思考を巡らせじっくりと探究してほしいと考えたため。

環境をデザインする



- Cedepの活動日に向けて、事前にアトリエリスタの方に幼児の姿を伝えながら環境の準備を進めた。アトリエリスタが園庭環境から幼児が興味をもちそうなものを選択し、種類ごとにトレーやアクリルケースに分類し、幼児が手に取りやすいようにした。
- Cedepの活動日以降、丸太や枝を森の中に溶け込むように集めて置いておき、幼児が親しめるようにした。

探究活動を実践する



- ・ 戸外での探索活動で幼児が興味を示したものを室内に運び、触れたり組み合わせたりして遊んだ。園庭にある身近な素材である丸太、砂、枝、葉っぱ、木の実などを改めて室内で見ることで、戸外にある状態とは異なる特別感が生まれ、素材そのものにじっくり関わるが見られた。丸太の穴に気付くと、土や砂、葉っぱなど、気に入ったものを次々と入れ変化を楽しんだ。



- ・ Cedepとの活動日以降、アトリエリスタと遊んだことが刺激となり、友達と力を合わせ大きな丸太を押ししたり、丸太から出ている枝を引っ張ったりして、大きな丸太を動かして遊んだ。途中で引っ張るために持っていた枝が折れてしまったので、丸太のくぼみを見つけて手を入れて押ししたり、枝が入りそうな穴を見つけて枝を引っかけたりして遊ぶ姿が見られた。

振り返りを踏まえた気付き

普段何気なく触れている木や土や葉などの自然物であるが、今回の活動を機に教師の意識が変容したことで、幼児と自然との出合わせ方が変わっていった。それによって、幼児にとって園庭の戸外の自然がじっくり遊び込む対象となることは大きな気付きであった。

身近な自然物は幼児にとって馴染みのあるものなので、様々な関わりを自分から試す姿につながっている。その中で、幼児が気付いたり楽しんだりしていることを丁寧に見取り、一人ひとりに合わせて、適切な声掛けや場づくりをすることが必要だと改めて感じた。